

「放浪」するオスたち

ニホンザルのオス集団とその関わり

川添達朗 かわぞえ たつろう / AA研究機関研究員

群れ生活を送るニホンザルの中には、一頭で行動したり、同性だけでグループを作ったりするオスがいる。彼らは、群れの外でどのような関係性を築いているのだろうか。群れを離れたオス同士の関係性に、フィールドワークから迫る。

フィールドワーク事始め

「北を目指せ。地形をよめ。」

2002年4月、私が野生のニホンザルを観察するために宮城県の金華山を初めて訪れたとき、調査の寝泊りに利用していた小屋に、このように書かれたメモが残されていた。島の北側にいる群れを観察してはどうかと勧められていたこともあり、調査するエリアの位置は事前に把握していた。しかし、現場の地形や森の様子、そこでどのような調査をするのかまでは、当時の私には全く想像することができなかった。このメモを見た瞬間、地図とコンパスと自分の勘だけを頼りに、いよいよニホンザルの調査に挑むのだということを実感した。その後の山歩きで何のトラブルも起きなかったかという、もちろんそんなことはなく、登山道を歩いていたはずが、いつの間にか道を外れ、人の踏み跡はおろか、戻る道についても確信がなくなってしまった。遭難したのではないかと焦る気持ちを落ち着かせるように何度も地図を眺め、両手を使わないと登れないような急斜面をよじ登った先に、探していたニホンザルの一群がいた。あのときの光景は今でも鮮明に思い出せる。

そのときから金華山に通い始め、いつの間にか20年近くが経とうとしている。私は多くの時間を、とくにオスたちの社会的な関わり方を調べることに費やしてきた。もちろんニホンザルにはオスもいればメスもいる。その中で、なぜオスなのか。それを説明するために、まずはニホンザルの一生について簡単に紹介しよう。



ニホンザルのオスはどの群れにも加わらず、オスだけでグループを作って生活することがある。

ニホンザルの母・娘関係はとても強く、生涯にわたって続く。

メスの一生・オスの一生

ニホンザルは性的に成熟したオトナのオスとメス、そしてコドモたちで構成される群れを作って生活している。このとき、一つの群れには複数頭のオスとメスがいるのが普通で、このような群れをとくに複雄複雌群と呼ぶ。メスは生まれた群れを離れることはなく、一生同じ群れで生活する。そのため、母親や姉妹など血縁者とのつながりが非常に強いのが特徴である。

一方、オスは、人間でいう思春期を迎えるころに、生まれた群れを出て行ってしまふ。その後は、他の群れに入ったり、どの群れにも入らずに、同じような立場のオス同士でオスだけのグループを作ったり、一頭で

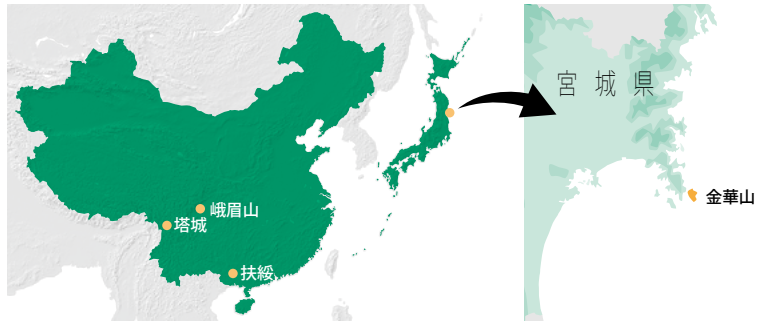
過ごしたりという生活を生涯にわたって続ける。生まれた群れを離れるため、メスに比べて、オスは血縁者とのつながりが薄くなる傾向がある。このようにオスとメスでは一生の過ごし方が全く異なっている。メスは、一つの群れで血のつながりがある相手と過ごし、オスは、同じ群れにとどまらず、生活する場所や付き合う相手を変える。いわば放浪生活を送るのである。

このようにメスが群れに残る社会の特徴を母系と呼ぶ。それとは反対にオスが群れに残り、メスが群れを出ていく場合は父系と呼ばれ、チンパンジーがその代表格である。母系の霊長類ではメスがその社会の中心となることから、研究対象はメスの生態や社

会関係に集中してきた。その一方で、同じ個体を継続して調査することが困難なこともあり、オスについての研究は、十分に進められてきたとは言いがたい。金華山は島という閉ざされた環境のおかげで、群れを出た後もオスを長期的に観察することができる。このような地の利により、続けることができた研究の一端を紹介したい。

ニホンザルの野外調査

最近では、霊長類の野外調査でもDNA解



析のような分子生物学的手法やホルモン分析といった生理学的手法等、実験室でのラボワークと組み合わせて行うことが珍しくない。そのような潮流の中、私の調査はごくシ

ンプル。双眼鏡とペンと小さな記録用のノ

トがあれば十分で、あとは体力勝負である。調査は、ニホンザルを顔や体の特徴で一頭ずつ見分けて名前を付ける個体識別からスタートする。サル顔なんて見分けられるのかとよく聞かれるが、実はこれは誰でもできるようになる。ここに挙げたのはすべて、私の調査対象のオスたちである。こうして並べて見比べると、何となくだが、みんなそれぞれに顔が違って見えると思う。顔が違う、ということが分かったあなたは、調査を始めることができる。あとは一頭一頭、より細かく観察して違いを覚え、名前を付けていけばいい。そうして対象となる個体を見つけたうえで、一日中サルの後をついて山の中を歩き回り、誰と誰の仲がいいのか、誰がけんかをしてその結果、誰に勝ったのか、そういったサル同士のやり取りを記録していくことで、その社会関係を明らかにしていく。

研究対象のオスたち。顔や体の特徴をもとに一頭一頭を見分けて名前を付けていく。上段左：クラニイ、上段右：コール、下段左：ハンズ、下段右：リベリ。



山の中を自由に歩き回るサルに一日中ついて歩き、彼らの行動を記録する。



オスたちの緩く長い付き合い

先ほど、オスの中にはどの群れにも入らず、オス同士でグループを作る個体がいることを紹介した。このような、群れの中にはいないオスは「群れ外オス」や「ハナレオス」と呼ばれており、その行動はこれまでほとんど知られてこなかった。群れ外オスを長期間観察した結果、彼らは年齢の近いオス同士で、まとまりの緩やかなグループを作ることが分かってきた。

メスを中心とする群れがまとまりを保ちながら生活しているのに比べると、オス同士のグループでは、メンバーの多くがまとまって行動しているときもあれば、ばらばらに離れて、いわば好き勝手に行動していることもあるようだ。かといって、烏合の衆といったようなただの寄せ集めのグループではなく、グループを作るオスの顔触れは決まっているし、中でも特定のオス同士のあいだで長きに亘って強い仲良し関係が維持されることもある。人間でも、若い男性たちが互いに「つるみ」、そこに仲間意識を感じたり、会わない期間があっても友情が続いていたりするが、それと同じように、ニホンザルのオスにも相手に応じた様々な付き合い方が見られる。

仲が良くても助けない!?

人間は、他者と協力し合ったり、助け合ったりするという特徴を持っている。これが人間だけに見られる特徴かという点、実はそうではない。人間以外の霊長類でも誰かを助けることはもちろんある。ただ、ニホンザルの場合にはそのような行動は、もっぱら血縁者間で見られる。つまり、母親と娘、あるいは、姉妹間でお互いに助け合うような行動が見られることが多く、オス同士ではそのような行動はあまり見られない。

実際に私が研究対象としていたオスたちの間でも、仲のいいオスが誰かに攻撃された際に助けに行くという行為はほとんど見られなかった。ニホンザルのオスは優劣関係、すなわち個体間の力関係がとてもはっきりしているという特徴がある。そのような場面では、誰かを助けに行っても自分が返り討ちにあってしまう可能性がある。そのため、仲のいい者同士であっても、助け合いが見られないのだろう。



峨眉山のチベットザルは厳しい冬の寒さの中で生活している。

ウナンシシバナザルは白黒のパンダ柄とたらこ唇がトレードマーク。



フランソワルトンはカルスト台地の急峻な崖で生活している。



フランソワルトンの調査風景。

研究の発展：海外のフィールドへ、ヒトの進化へ

これまでに紹介してきた研究が一段落ついたところで、幸いなことに海外の大学で研究職に就くことができ、2017年からの3年間、中国に生息している霊長類の調査をしてきた。ご存じのように、中国は広大な面積を持ち、北部の砂漠地域から、南部の亜熱帯性森林に覆われる地域まで多様な環境がある。現在、中国本土には20種の霊長類が生息するとされ、同じ地域に複数の霊長類種が生息しているところもある。私は現地の大学の研究者や学生らの協力を得ながら、四川省峨眉山のチベットザル、広西チワン族自治区扶綏のフランソワルトン、雲南省麗江市塔城のウナンシシバナザルといった霊長類の観察を行うことができた。

これらの種には、ニホンザルと同じような社会的な特徴もあれば、全く違う特徴も見つかっている。例えば、前項で紹介したように、ニホンザルのオスたちは、互いに

助け合うことはないが、チベットザルでは、オスたちが助け合うことがあるようだ。チベットザルはニホンザルと同じ複雑複雌群だが、フランソワルトンやウナンシシバナザルは群れにオスが一人しかいない単雄複雌群であるという違いもある。このように、ヒト以外の霊長類にもそれぞれの種ごとに異なる群れの形や社会がある。

私たちヒトの社会の特徴とは何だろう。霊長類学はこの問いを追求していく分野である。もしかしたら、私たちがヒトに特有だと思っている特徴が、実は他の霊長類にも見られるかもしれない。ヒトの社会を知るためには、ニホンザルを含め世界中の様々な、ヒトに近縁な霊長類の社会を知り、その共通点や相違点を探ることが必要である。フィールドワークによって、霊長類の社会を丹念に調べることで、その起原や進化の過程に迫ることができ、ひいては私たちヒトのことを理解することにもつながると期待している。

